

【研究ノート】

今の形 シルエット を探る トレンチコートに見るスタイルの変遷と今

An Investigation of Current Styles:
Style Changes and Recent Trends in Trench Coats

福崎 エベリン桃子

FUKUZAKI, Evelyn Momoko

はじめに

「ファッション」をつくるうえで最も注目すべきポイント、それは、今の形 シルエット をとらえることだと考える。

時代の流れのなかで常に変化し続けるファッション界で、シーズンごとに発信されるトレンドの要素のひとつにシルエットがある。洋服そのもののかたちを指すシルエットは、Aライン、フィット&フレアー、ボックスなど、様々な名称で表されるが、ここで言う今の形 シルエット とは、サイズ感とバランス感を指す。洋服はどんなアイテムでも、その時々々のサイズ感とバランス感でコーディネートされて人が着用することで、その時代の雰囲気をつくりだしている。それは、トレンド感のあるデザインアイテムに限ったことではなく、スタンダードアイテムにも見ることができる。

スタンダードとは、時代を経ても変わることのない定番、もっとも基本的・標準的なものを指す。しかし、流れの速いファッション界で、時代に取り残されることなく、長い間色褪せず愛され続けているスタンダードアイテムは、基本的なデザインと機能性を保ちながら変化してきた。何気なく街を見ていると、同じようなデザインのアイテムでも、今の時代にさらりとはまるものと、どこことなく古さを感じるものがあることに気がつく人は多いのではないだろうか。その違いが、今の形 シルエット かどうかなのである。

本研究では、スタンダードアイテムの一例としてトレンチコートをサンプルにする。時代ごとの形 シルエット の変遷をたどることで、今の形 シルエット を的確にとらえたものづくりができるのではないだろうか。そして、その要素を加味したパターン展開で実物を制作し、実際に着用して検証する。

トレンチコートのあゆみ

(1) トレンチコートの歴史

トレンチコートのはじまりは、雨天用のコートのための素材として1888年にイギリス人のトーマス・バーバリーによって発明された、綾織のコットン地「ギャバジン」である。これは、防水性ととも、夏は涼しく冬は暖かいという特性を持ち、それまでのゴム引きやオイル引きの素材と比べ快適な、全天候対応の素材であった。この生地を使って作られたコートが、第一次大戦(1914~1918年)時に塹壕(トレンチ)で着用されたことから、「トレンチコート」の名がついたと言われている。イギリス軍からの要望で、軍用としての機能が集約されたデザインのトレンチコートは、当時、アクアスキュータム社とバーバリー社で製造された¹⁾(図1)。その後、1928年頃を中心にトレンチコートは男性の間で街着として流行する²⁾。1930年代頃の資料には女性のトレンチコート姿が見られるようになるが、この時期のスタイルではメンズのコートをそのまま羽織ったようなイメージが強い(図2)。第二次大戦では再び軍服として着用され、慰問に訪れる女優のトレンチコート姿の資料も残っている。そして戦後のファッション界の目覚ましい発展とともに、誰からも愛されるスタンダードアイテムとして広がっていく。



図1 1918 Burberry



図2 1930 Burberry

年代	1950s	1960s	1970s 前半
時代のトレンド	<ul style="list-style-type: none"> • 1947年クリスチャンディオールがニュールックを発表 • オートクチュールの黄金期 	<ul style="list-style-type: none"> • マリークワント、クレージュがミニスカートを発表 • ポップカルチャー、ストリートファッションの時代 • ツイッギーのスタイル 	<ul style="list-style-type: none"> • プレタポルテの勢い • ベトナム戦争とヒッピー • コーディネートファッションの時代
スタイル写真	 <p>*1 1952 Aquascutum</p> <p>*2 1950s Aquascutum</p> <p>*3 1957 Sophia Lauren</p>	 <p>*4 1964 Catherine Deneuve</p> <p>*5 1968 HonorBlackman in Aquascutum</p> <p>*6 1963 Audrey Hepburn in Charade</p>	 <p>*7 1970 Miss Burberry</p> <p>*8 1972 Christian Aujard</p>
トレンチコートのかたち	<ul style="list-style-type: none"> • 身幅が大きなAラインでウエストの絞りが無い。ベルトをウエスト位置できつく締めることで身頃部分はたっぷりブラウジングし、スカート部分のふくらみもカバーする。 • アームホールが大きく、かなりゆったりとしたラグラン袖。 • 着丈は長く、すねまで。 	<ul style="list-style-type: none"> • 着丈が短くなり、ひざが見え隠れする。 • 身幅の変化は少ないが着丈が短くなった分、裾のシルエットに張りが出ています。 • アームホールは大きく、ゆったりしているがデザインによってセットインスリーブもみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> • 身幅が細くなり、ブラウジングの少ないすっきりしたシルエット。 • アームホールが小さく細身の袖。セットインスリーブが多くみられる。 • パンツやブーツが登場し、それに合わせるひざ丈が中心。 • 衿腰が高く、張りのある大きめなラベル。

図3 トレンチコートのシルエットの変遷

1970s 後半	1980s ~ 1990s 前半	1990s 後半 ~ 2000s	2000s 後半 ~ 現在
<ul style="list-style-type: none"> • 1975年サンローランがタキシードルックを発表、女性のパンツスタイルが認知される • コンサバティブファッション • アウトドア、ワークウエア 	<ul style="list-style-type: none"> • キャリアウーマンと厚い肩パットのパワースーツ • ダナキャラン、ラルフローレン、ジョルジオアルマーニなど • ボディコンとジェンダーレス 	<ul style="list-style-type: none"> • 高級ブランドの再編と新たなブランドの参入で、ビッグトレンドの生まれない時代 • アントワープ6 • リアルクローズ • ミニマルファッション 	<ul style="list-style-type: none"> • ファストファッションの伸長 • 素材の機能的進化 • コーディネートや演出によって新しさを表現する、タブーのない時代
<div data-bbox="188 450 419 831" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="260 837 419 860">*9 1979 ,Meryl Streep</p> <div data-bbox="188 875 419 1256" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="228 1263 419 1285">*10 1979 ,Jackie Kennedy</p>	<div data-bbox="515 450 746 831" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="579 837 746 860">*11 1987 Men s Vogue</p> <div data-bbox="515 875 746 1256" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="547 1263 746 1285">*12 1985 ,Charlotte Rampling</p> <div data-bbox="515 1301 746 1682" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="603 1688 746 1711">*13 1993 ,Madonna</p>	<div data-bbox="842 450 1074 831" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="938 837 1074 860">*14 2002 ,Burberry</p> <div data-bbox="842 875 1074 1256" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="938 1263 1074 1285">*15 2005 ,Burberry</p> <div data-bbox="842 1301 1074 1682" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="938 1688 1074 1711">*16 2006 ,St.John</p>	<div data-bbox="1169 450 1401 831" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1265 837 1401 860">*17 2012 ,Burberry</p> <div data-bbox="1217 875 1353 1256" data-label="Image"> </div> <p data-bbox="1233 1263 1401 1285">*18 2011 ,Alexa Chung</p>
<ul style="list-style-type: none"> • ラフな着こなしが登場、全体にゆとりの加わった動きやすいシルエットになる。 • 縦長のラインで、裾幅の広いパンツにひざ下丈のコートにコーディネート。 • 衿の形や大きさは70年代前半から続いている。 	<ul style="list-style-type: none"> • 身幅、肩幅、袖幅すべてが大きく、たっぶりとしている。肩パットの入ったラグランスリーブで、さらに大きさを強調している。 • 着丈はコーディネートによって様々なバリエーションが増え、すね丈や、ヒップライン下のショート丈なども。 	<ul style="list-style-type: none"> • 身幅、肩幅、袖幅が徐々に小さくなり、コンパクト化。タイトに見せるためコートの中も厚物の重ね着はあまりしなくなる。 • デザインや素材のバリエーション自体がかなり増えるが、ベーシック路線ではひざ丈のスカートに合わせた着丈が中心。 	<ul style="list-style-type: none"> • タイトな流れが続き、ショートパンツやスカート丈は増々短くなり、コンパクトなコーディネートに合わせて着丈もひざ上が増える。 • コーディネートにタブーがない分、ベーシックとして無駄がなくシンプルな形におさまる。

(2) シルエットの変遷

1950年代以降の、時代ごとの流行のスタイルとトレンチコートのシルエットの変遷を見ていく(図3)。

ファッションの歴史と変遷を端的にたどっていくと、デザイナーたちが文化的な背景などからインスパイアされて新たなファッションを発表し、それが爆発的なブームを呼び、それを機にファッションの新時代・新スタイルへと変化する、というようにわかりやすい転換期が見て取れる。しかし、大きなデザイン革新の少ないスタンダードアイテムについては、だれか一人のデザイナーが発表する劇的な変化というより、ファッション全体の変遷にともなう部分的に、例えば着丈や身幅の分量などが微妙に変化しながらその時代の形 シルエット へと移り変わっていくように見える。つまり、その時代のトレンドから、時代を生きる多くの人々が感じている「今の気分(スタイル)」を様々なアイテムにおいて形 シルエット に取り込むことで、いつの時代にも忘れ去られてしまうことなく、その時代を象徴するファッションに溶け込んでいるのだ。トレンチコートについて言えば、コートというアイテムの性質上、中に着るもののシルエットの影響を受けるので、アームホールや袖の太さ、また着丈のバランスなどに時代感がよく出ていってよいだろう。

(3) 今の気分

ファッションにおいてだけでなく、身の回りの日用品すべてにおいて多種多様な現在を、一つの流行や言葉で定義するのは非常に難しいが、今を語るうえでの重要なキーワードとして「スマート」について考える。シンプルで機能性に優れた新製品が身の回りの様々な分野で話題になっている。ファッションにおける「スマート」を考えると、それはとにかく見た目の「細さ」だけを追求するという意味でなく、着る人にとって快適な機能性(暖かさや涼しさ、動きやすさや軽さ)を組み込んで、しかも美しく無駄のない形 シルエット を指す。高機能な素材で着心地を追求したインナーや、スリムで無駄なしわがよらず、しかも動きにフィットするデニム、軽くて肩の凝らないダウンジャケットなどが、メガヒット商品としてマス層を対象としたマーケットで話題になっている。ファッションである以上、見た目はもちろんだが、それだけでなく、機能性も含めた「スマート」が今の形 シルエット を考えるポイントと言えるのではないだろうか。

これを踏まえてトレンチコートについて言えば、もともと軍用であるため、すでにデザインのディテールとして様々な機能性が組み込まれている。それに加え

て考える要素として着心地(重ね着のしやすさや運動機能)と着用時の見た目のスマートさ、そして忘れてならないのが他のアイテムとのコーディネートバランスである。ファッショントレンド自体がかなりの振り幅をもった現在では、一つの形 シルエット に絞ることが難しく、カジュアルに合わせるのか、フォーマルに合わせるのかによってもコーディネートバランスは変わる。テイストと用途に合わせた微妙なバランスの違いまで意識したものが、今の気分フィットする「スマート」なトレンチコートの定義と言えよう。

・実物制作

(1) サンプル製品

今回、実物制作を行うにあたり、英国 Burberry 社のトレンチコート(製造年不明)をサンプルとしてデザインディテールや仕様の参考にした(図4)。



図4 サンプル製品

比較的ゆったりとしたシルエットで、着用時にベルトでブラウジングすることでたっぷりとしたドレープが出る。着丈はひざ下である。脇はぎで、ウエスト位置で少ししぼっている。仕様の特徴として、前見返しと裾、後のストームフラップ端に不織布の芯がふらしで入っており、他の箇所には一般的な接着芯が使われている。また、袖裏は表地と同じくラグラン線に沿った切り替えになっているが、肩部分のみ、裏側から表地と同素材をかませ補強している。

(2) 制作に使用するボディと原型

今回の制作には 8 Tall Miss/AMIKO FASHIONS のボディを使用した(図5)。丸みのある女性らしい Miss 体型に比べ背丈が高く、スポーティーな体つき³⁾である。モデルサイズとして使用されることの多いボディだが、一般標準としての Miss 体型と比べて筋肉質で肩に厚みがあり、肩傾斜が少ない。

このボディに合わせてドレーピングで制作した原型に、ゆるみを加えて展開したプリンセスライン原型をもとにする(図6、図7)。今回はコートのため、中に着るブラウスとジャケットの厚み分を考慮してプリンセスライン原型に2サイズアップ(B+6.0 cm)のグレーディングをしたものをコート原型として使用する(図8)。



図5 8 Tall Miss ボディ

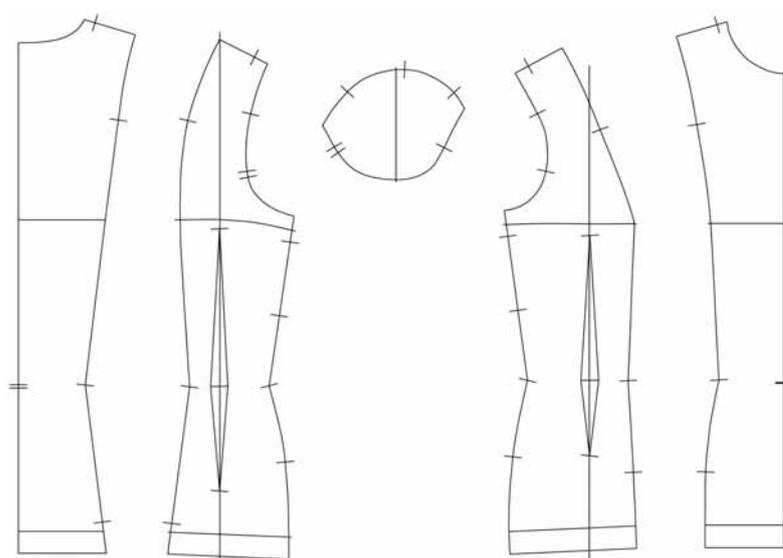


図7 プリンセスライン原型



図6 プリンセスライン原型トワル

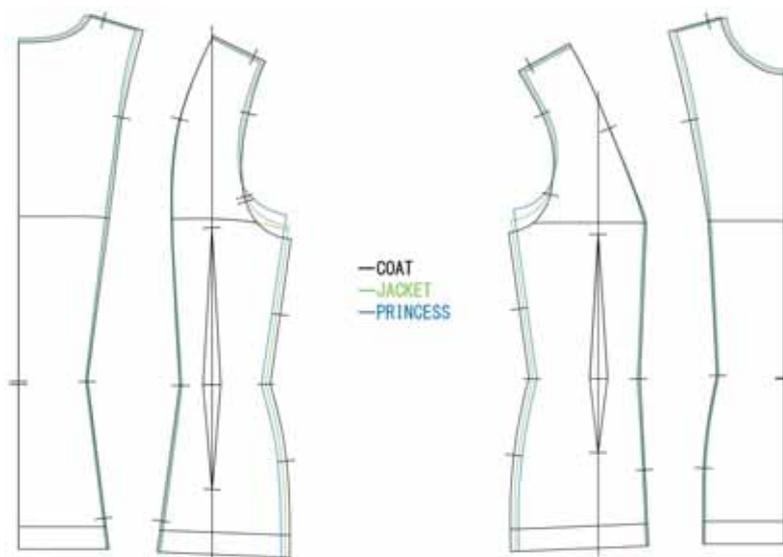


図8 コート原型

(3) デザインとシルエット

すっきりとしたラインで、ウエストをベルトで締めたとくにも身頃に沢山の布がたまらないように3パネルの仕様で適度にウエストをしぼる。ブラウジング分量はほとんどとらないため、ベルトループの位置を高め(ボディのウエスト位置と同じ高さ)にする。着丈は今のスカートやパンツとのコーディネートバランスを考え、ひざ丈に設定。袖は、細身に見せつつ、秋~冬シーズンのコートとして中にジャケット程度の厚みを重ねても着心地を損なわないために、動きに必要な分量を加える。衿は全てのボタンを留めたとき、第一ボタンをあけたとき、そして衿を立ててチンフラップで固定したときの3通りのバランスを考慮し、さらに、後ろだけ立てて前を開いた形が美しく見えるかどうかにも着目した。

(4) パターン展開

目的に応じた機能性を的確に組み込むために、パターン操作によって身頃と袖の展開をする。

展開解説(図9~16)

完成パターン(図17)

トワル(図18、19、20)

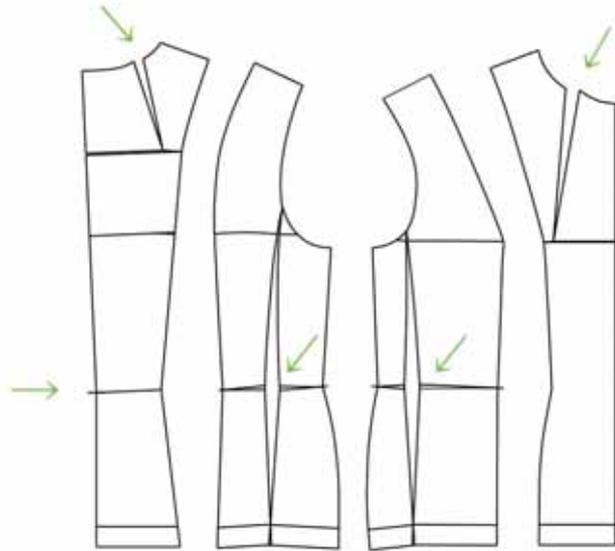


図9 パターン展開手順1(コート原型)

- ・ 衿ぐりに浮かし分を入れる。
- ・ 後ろ中心の浮き分をたたむ。
- ・ パネルライン位置を決め、パネルラインにダーツ分を展開して切り離す。

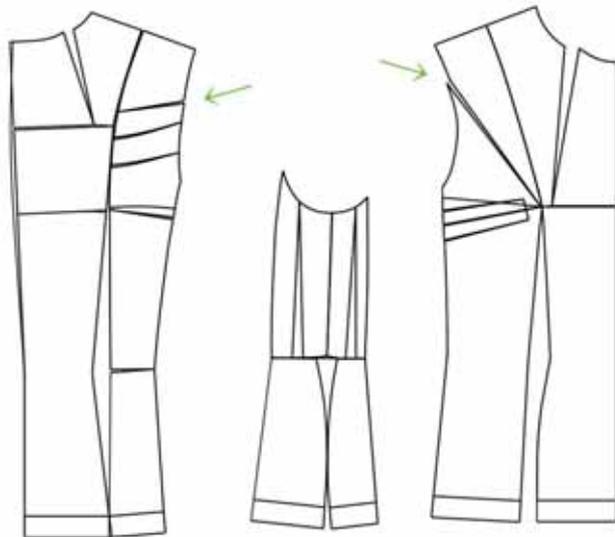


図10 パターン展開手順2(身頃部分)

- ・ 各パーツを合わせる。このときラグランスリーブとして必要なアームホールの浮かしを入れる。

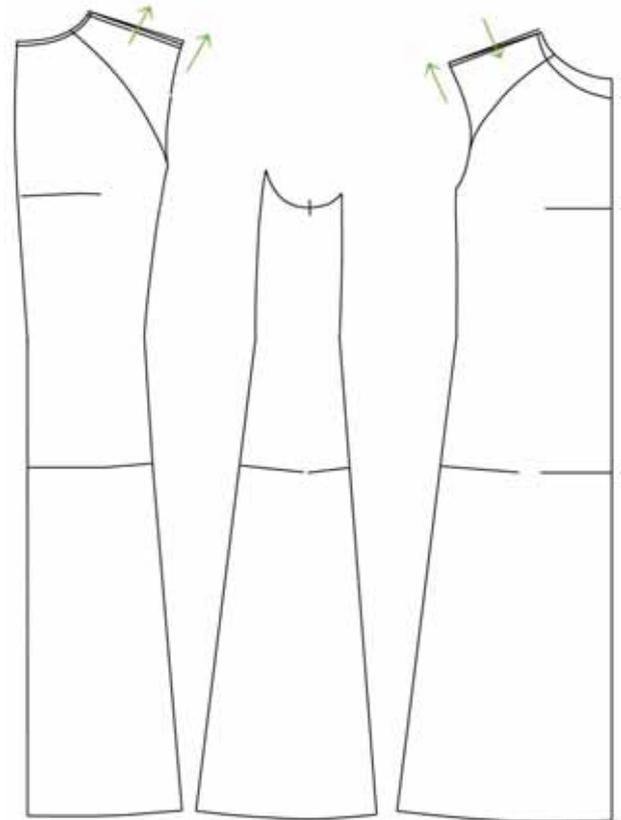


図11 パターン展開手順3(身頃部分)

- ・ 着用時に後ろに抜けにくくするため肩線を前に移動し、肩先でもアームホールの浮かし分を入れる。

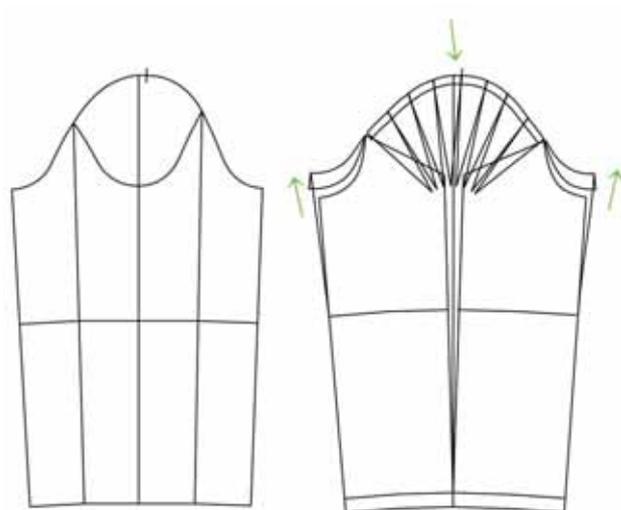


図12 パターン展開手順4(袖原型)

- ・ 動きやすいラグランスリーブにするため原型の袖山を低く展開する。袖底にも運動量としてマチ分を展開する。

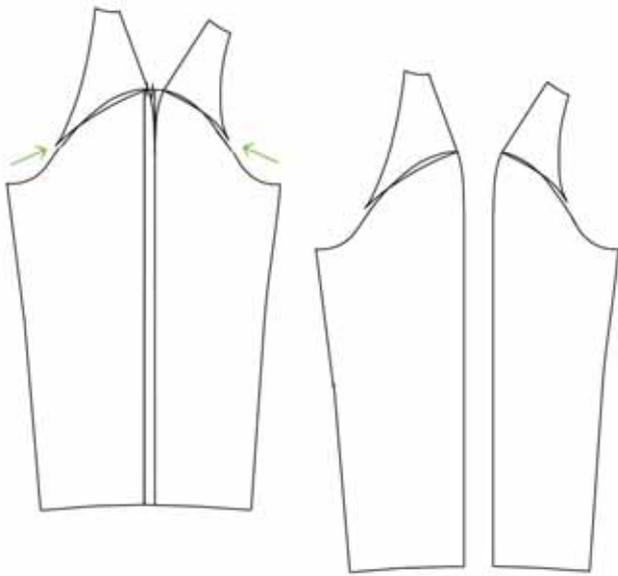


図13 パターン展開手順5（袖部分）

- ・身頃のラグラン線部分を切り離し、袖山に据える。腕を上げた時に身頃に引かれる運動量として、袖ぐりから少し浮かせる。
- ・肩線からつながるように袖の縫い目線を入れ、切り離す。

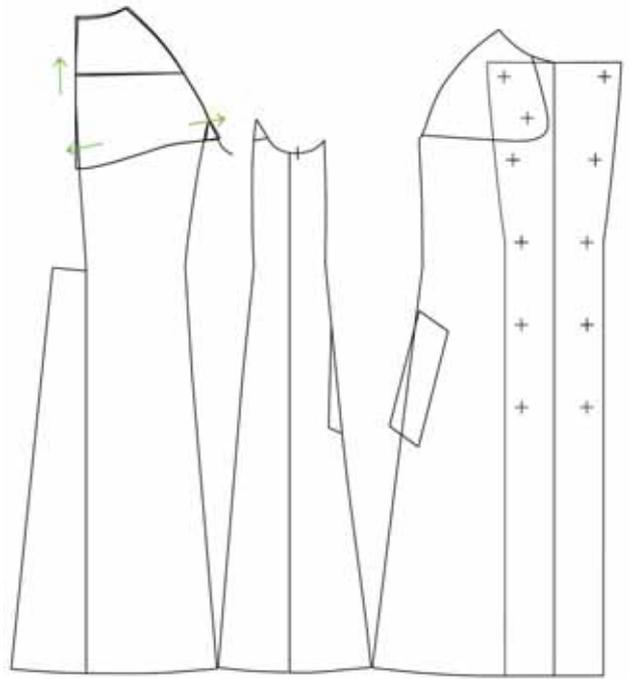


図15 パターン展開手順7（身頃部分）

- ・デザイン線を入れる。
- ・ケープドバックヨークは腕の動きで引かれる運動量と、背中丸みに沿わせたときの上乗り分量を加えて展開する。

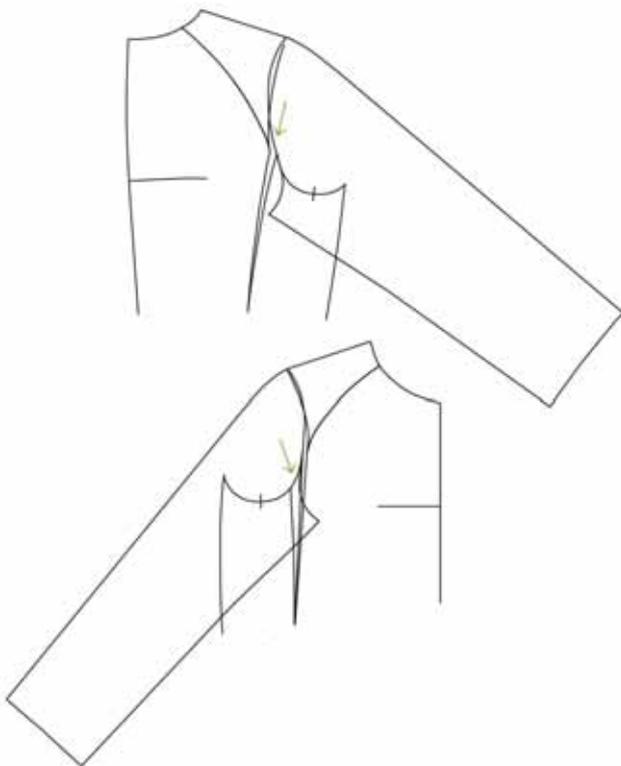


図14 パターン展開手順6（脇部分）

- ・身頃側にも同様に腕を上げた時の運動量を、ウエストから袖ぐりに向かって加え、パネルラインを修正する。

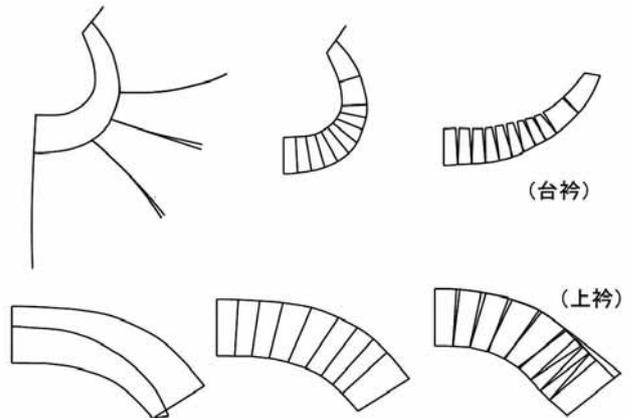


図16 パターン展開手順8（衿部分）

- ・衿は首にすいつけたカーブの台衿にすることで、衿を立てても安定しやすい。衿は見た目のバランスを重視したため、ドレーピングでの成形を優先し、その結果をもとにしたパターン展開図とする。

(5) 実物作品

使用素材 コットンギャバ（表地） 先染めチェック
 コットン（裏地） ツートン（袖裏） 不織布（芯地） スレキ（袋布） ダンレーヌR
 3000（接着芯）

完成作品（図21、22、23）

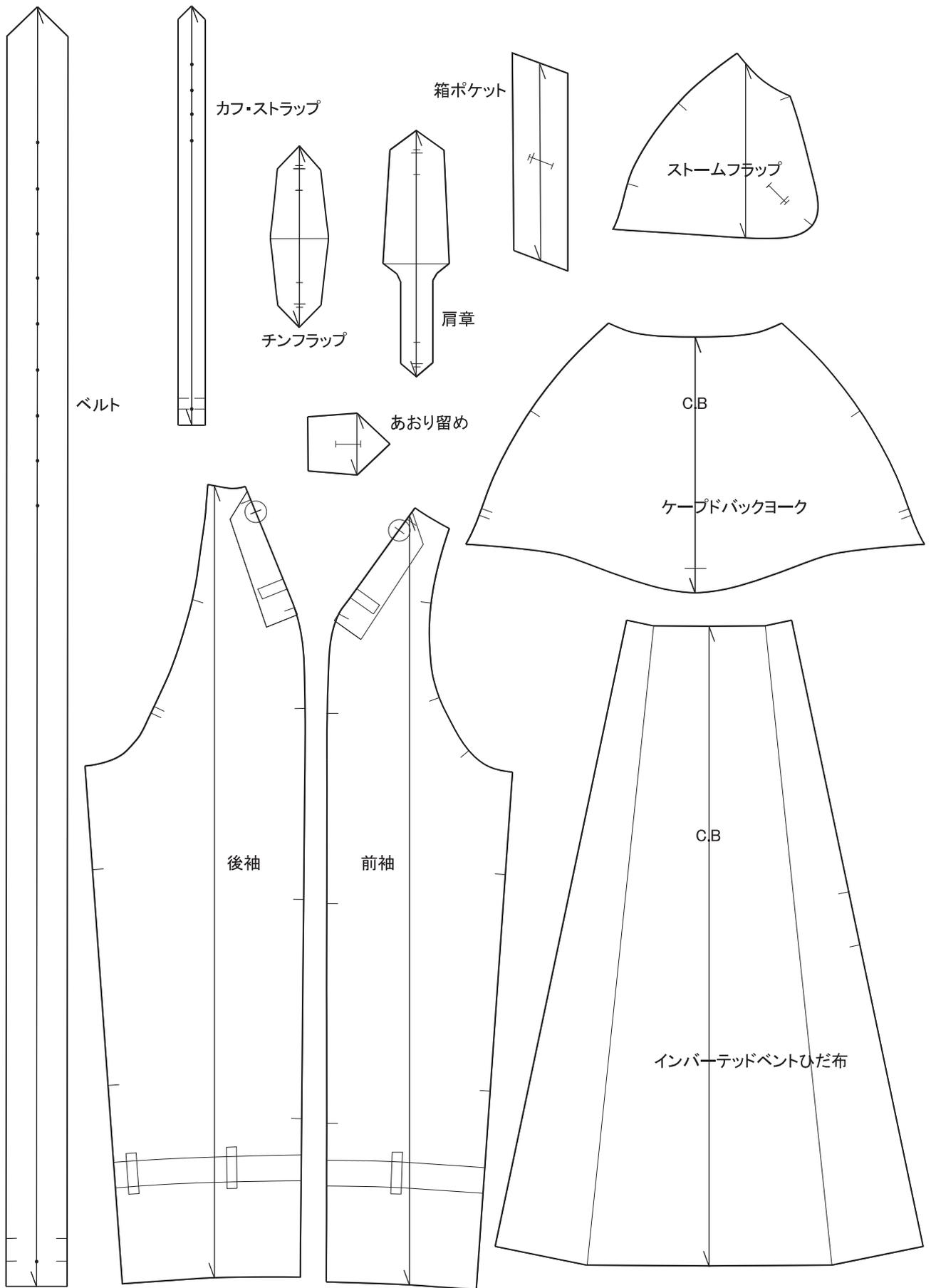


図17 完成パターン(1/5製図)

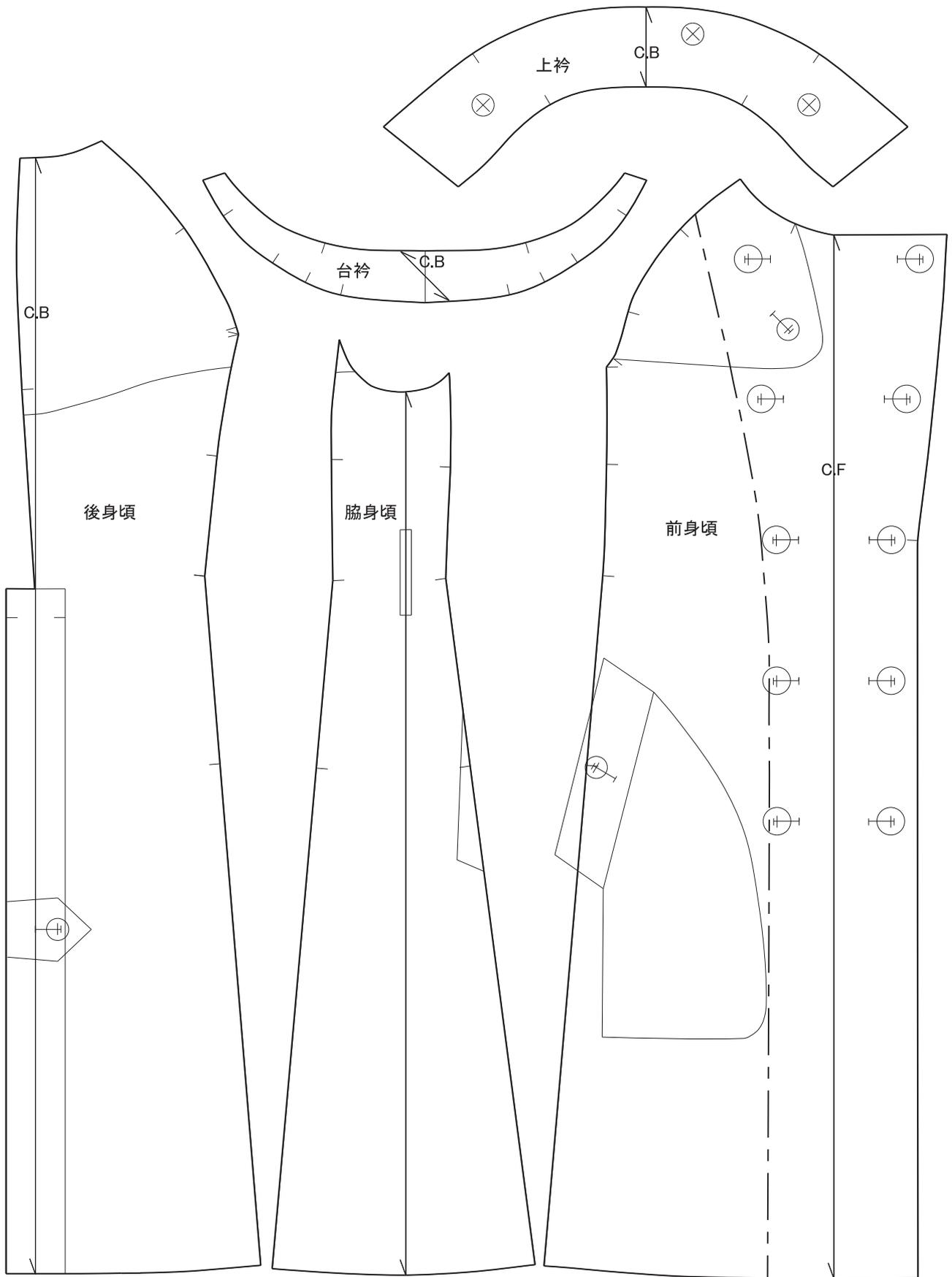




図18 トワル(前)



図19 トワル(横)



図20 トワル(後)



図21 完成作品



図22 完成作品



図23 完成作品

(6) 検証

パターン作成の段階で、衿を立てたときに保ちやすい形を意識したが、試作では出来上がりの風合いがイメージよりも若干柔らかく仕上がった。表衿(背中心にタテ地)と地衿(背中心で正バイヤスの二枚はぎ)両方に同じく接着芯を貼って仕立てているが、立てたときの張りを意識すると地衿側をもう少し硬くしても良かったように感じる。

前身頃の打ち合わせ部分と裾に、サンプル製品と同じく不織布を芯地として据えた。ふらしにすることで生地動きが出るので接着と比べて表地の風合いに影響が出にくく、しっかりとした形を保ちやすい。

着心地に関しては、袖はラグランスリーブでもできるだけ細く見えるように作っているが、腕を通すと見た目よりもずっとゆったりとした心地良さが感じられる。ここ数年のアウトター市場ではゆとりを最小限まで削った細身のコートが多く、肩周りが動きにくく重ね着もしにくいものを沢山着てきたので、適切な運動量を加えても細く見せるためのパターン操作の有効性を、実物に袖を通すことで実感できた。ただし今回、秋～冬用のコートを想定して制作したため、スプリングコートとしての用途に対してはゆとりが多く、風合いもしっかりとしているためやや大きく感じる。スプリングコートを想定した場合、1サイズダウンのジャケットサイズの原型から展開し、着丈もやや短く設定するのがよいと思われる。

まとめ

今の形 シルエット を的確につかんだものづくりをするということは、作り手として常に感度の良いアンテナを張り、時代の気分とその微妙な変化を素早く察知しなければならない。そしてそれを形にするには、多くの経験と知識、修練が必要である。今回の実物制作においても、様々な要素をパターン操作に組み込んだが、その分量感やバランスについては、トワルでの修正を何度も繰り返すことで完成したものである。さらに、実際に袖を通して他のアイテムとコーディネートしてみることで、季節に合ったサイズ感や着丈のバランスなど、新たな発見もあった。服は、人が着ることで完成する。着る人にとってどう感じられるのか、また、それを見る人はどう感じるのか、それらすべてが今の形 シルエット をつくる要素なのではないだろうか。この制作を完成品として完結するのではなく、一つの経験として次につなげていくことが何よりも大切であると感じる。その意味で「今の形 シルエット を探る」という研究は、終わることのない

テーマとしてこれからも継続し、ものづくりの基本にしていきたい。

註

- (1) 林勝太郎「トレンチコート物語」(くろすとしゆき監修『THE COAT』婦人画報1984所収) pp.12 - 17.
- (2) 堀洋一「コートの200年」(註(1)の本所収) pp.10 - 11.
- (3) 株式会社アミコファッションズ「立体裁断用ドレスフォームのご案内」パンフレットより.

図の出典

- 図1 Nick Foulkes, *The Trench Book*, ASSOULINE PUBLISHING, New York, 2007より転載
- 図2 図1に同じ
- 図3 *1~11・13・15・16 図1に同じ
*12・18 マーブルトロン『LOVE the COAT!』2011より転載
*14 出典不明
*17 集英社「SPUR」2012年10月号より転載
- 図4 筆者撮影/資料提供 小山文子/撮影協力 小山千暁
- 図5 筆者撮影/資料提供・撮影協力 小山千暁
- 図6 筆者制作・撮影/撮影協力 小山千暁
- 図7~17 筆者作図
- 図18~23 筆者制作・撮影/撮影協力 小山千暁

参考資料・文献

- (1) 横田尚美『20世紀からのファッション史 - リバイバルとリスタイル -』原書房 2012
- (2) 島崎隆一郎『男のコートの本』文化出版局 2008
- (3) 大野順之助監修・小山千暁他『ジャケット&コート』アミコファッションズ 1995
- (4) 小山千暁・小山文子『立体裁断 ジャケット』紫峰図書 2008
- (5) 小山千暁・小山文子『立体裁断 基本理論からの応用』耕文社 2012